

# 中学・高校における英語教育の 問題点と今後の方向

小 林 淑 哉

## 目 次

### 序 論

#### 英語教育の諸問題

1. クラスの生徒数
2. 教師の負担
3. 補助機材及び施設
4. 生徒の自主性
5. 入 試
6. 教授法
7. 能力別学級
8. 選択科目か必須科目か
9. 教科書
10. 教育現場の合理化

### む す び

### 序 論

英語教授法は戦後めざましい発展を遂げ、構造言語学にもとづく Oral Approach とその教材において頂点に達したかと思えば、Chomsky を中心とする変形文法 (Transformational Grammar) が構造言語学に対するアンチテーゼとして大きな問題を投げかけようとしている。

一方教育産業も発達して、明治以来旧態依然たる主役をつとめてきた黒板と白墨がフィルムやテープに変わり、更に LL やオーバヘッドプロジェクター (Overhead Projector) などすばらしい科学技術が教育に導入されようとしている。

このような最高の教育技術が自分の出番を待ち、一部にはすでに利用されるような時代になっているにもかかわらず、英語教育に無駄が多く、思うような効果をあげ得ないのは何故であろうか。国民皆兵ならざる「国民皆英語教育」ともいうべき現状の中で、英語教育のために我が国の学生が膨大な時間を消費し学校が莫大な費用を投じているにもかかわらず、その実りはあまりにも少ない。量が質を決定するならば英語学習人口が増えたからとてそれに正比例して英語教育の成果が上がるとは考えられないが、英語教育にかけた負担・努力の総和が、仏語・独語の語学教育にかけたそれに比べて雲泥の差がある以上、現在よりもっと大きな成果を英語教育に期待してよいのではないだろうか。ところが英語教育の成果は底辺があまりにも広くて先細りのピラミッドにもたとえられよう。それは、最高と思われる教授法や最新と考えられる施設・機材が如何に利用されようとも、その土台ともなるべき教育制度や学校の教育態勢に非合理性や非能率性があるからではなかろうか。それは立派なビルが立ち並んでいるのに道路や下水道の不完全な都市生活の歪みにも似ている。我々は今や英語教育の改革を英語教育の内側で論じていては解決の道はない。

英語教育の効果を十分に発揮させるものは 1. 教授法, 2. 教材, 3. 英語教育をとりまく諸条件の三つである。この三者を建築にたとえるならば、教授法は建築設計にあたり、教材は建築資材、そして英語教育をとりまく諸条件はさしずめ基礎工事にあたるといえよう。しかもこの諸条件とは英語教育そのものの問題ばかりではなくて、教育全般にもつながるものである。そこでまず英語教育の諸条件とはどんなものがあげられるかを考

えてみよう。私が昭和40年無差別抽出で全国の中学・高校の英語の先生1060名にアンケートを送ったところ、314名の解答を得た。（以下アンケートの集計はすべてそのときのものである。）先ずアンケート(1)及び(2)に

ア ン ケ ー ト 1

貴校における英語教育は成功しているとお考えですか。			
項	目	解 答 数	百 分 比
A	成果をあげている	29	9
B	まあまあ成果はあがっている	122	39
C	よくも悪くもない	70	22
D	あまりよくない	70	22
E	悪 い	15	5
F	その他	3	1
G	わからない	4	1
	答なし	1	0

アンケート 2

我が国英語教育はこれ程努力し、普及してきましたが、その成果はあがっているとお考えですか			
項	目	解 答 数	百 分 比
A	成果をあげている	39	12
B	まあまあ成果はあがっている	154	49
C	よくも悪くもない	33	11
D	あまりよくない	71	23
E	悪 い	8	3
F	その他	1	0
G	わからない	7	2
	答なし	1	0

よってアンケートに解答をよせてくれた先生が英語教育の成果をどのよう  
にみているかをさぐってみよう。次にアンケート(3)は「英語教育の成果が  
あがっているとすればその原因は何か」を示したものであり、アンケート  
(4)は成果があがっていないと考えた場合の原因を示したものである。アン  
ケート(3)を得点順にならべると〔第1表〕のようになる。又、アンケート  
(4)を得点順にならべると〔第2表〕となる。そこでこの〔第2表〕の順位  
にもとづいて英語教育の現状と今後の方向について考えてみたい。

アンケート 3

我が国英語教育の成果があがっているとすればその原因は何ですか。 (○をいくつつけてもかまいません)。				
項 目	中 学	中高共通	高 校	総 数
A 能力別学級ではない	2	5	0	7
B 学級担任制度	1	2	0	3
C 名目上は選択科目でも実質的には 必須科目である	64	31	34	129
D 入試がある	51	27	29	107
E				
F 文法教科書がよい	1	1	2	4
G 読本教科書がよい	7	3	3	13
H 生徒が勤勉だから	14	12	9	35
I 教師が努力しているから	65	28	28	121
J				
K 教授法がよい	26	8	5	39
L hearing, speaking を重視している から	40	12	8	60
M reading, writing を重視している から	12	6	5	23
N 基礎的で単純な反復練習を重視して いるから	65	26	17	108

O 高度な内容のものを重視しているから	0	2	3	5
P 同一校で英語科の教師が協力するから	25	14	10	49
Q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されているから	13	5	7	25
R 教師が優秀だから	8	2	3	13
S				
T				
U				
V				
W 日本人は外国語に対するあこがれが強いから	11	7	9	27
X その他	3	2	0	5
Y わからない	0	0	0	0

注——上のアンケートにおいて「中学」・「中高共通」・「高校」の三つに分けたのは、英語教育については中学・高校によってそれぞれ違う意見をお持ちの先生もおられるので次のような前提のもとに解答を集計したからである。

「先生の御意見は中学を念頭においてのお答えですか、高校についてですか、それとも中学高校共通の問題としての御意見ですか。いずれかにおきめ下さい」尚、アンケート (4) 及び (11) についても同様である。

ア ン ケ ー ト 4

我が国英語教育の成果があがっていないとすればその原因は何ですか。 (○をいくつつけてもかまいません。)				
項 目	中 学	中高共通	高 校	総 数
a 能力別学級でない	28	11	13	52
b 学級担任制度と共に，教科の主体制も重視するという風潮がない	6	2	3	11
c 名目上は選択科目でも実質的には必須科目である	19	5	6	30
d 入試が悪い	19	21	23	63
e 時間割の組み方が悪い	6	2	5	13
f 文法教科書が悪い	1	5	5	11
g 読本教科書が悪い	6	7	4	17
h 生徒に自主性が乏しく恥ずかしがりやだから	33	12	19	64
i 教師が生徒を自主性がないようにしむけるから	11	1	5	17
j 教師がまちがった厳格主義で指導するから	2	1	0	3
k 教授法が悪い	13	10	7	30
l hearing, speaking を重視していないから	16	18	10	44
m reading, writing を重視していないから	5	1	4	10
n 基礎的で単純な反復練習を重視しないから	26	20	13	59

o 高度な内容のものを重視しないから	1	1	0	2
p 同一校で英語科の教師が協力しないから	3	8	1	12
q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されていないから	2	1	1	4
r 教師が不勉強だから	18	14	6	38
s 教師の負担が大きすぎるから	63	30	28	121
t 教師が薄給だから	22	10	10	42
u 補助機材・施設が充実していないから	48	20	27	95
v クラスの生徒数が多すぎるから	64	31	37	132
w 日本人にとって英語の学習は困難だから	17	8	13	38
x その他	2	3	1	6
y わからない	3	1	4	8



〔第 1 表〕

順 位	項 目	解 答 数
1	C 名目上は選択科目でも実質的には必須科目である	129
2	I 教師が努力しているから	121
3	N 基礎的で単純な反復練習を重視しているから	108
4	D 入試がある	107
5	L hearing, speaking を重視しているから	60
6	P 同一校で英語科の教師が協力するから	49
7	K 教授法がよい	39
8	H 生徒が勤勉だから	35
9	W 日本人は外国語に対するあこがれが強いから	27
10	Q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されているから	25
11	M reading, writing を重視しているから	23
12	G 読本教科書がよい	13
12	R 教師が優秀だから	13
14	A 能力別学級でない	7

15	O 高度な内容のものを重視しているから	5
15	X その他	5
17	F 文法教科書がよい	4
18	B 学級担任制度	3
19	Y わからない	0

〔第 2 表〕

順位	項目	解答数
1	v クラスの生徒数が多すぎるから	132
2	s 教師の負担が大きすぎるから	121
3	u 補助機材・施設が充実していないから	95
4	h 生徒に自主性が乏しく恥ずかしがりやだから	64
5	d 入試が悪い	63
6	n 基礎的で単純な反復練習を重視しないから	59
7	a 能力別学級でない	52
8	l hearing, speaking を重視していないから	44

9	t 教師が薄給だから	42
10	w 日本人にとって英語の学習は困難だから	38
10	r 教師が不勉強だから	38
12	k 教授法が悪い	30
12	c 名目上は選択科目でも実質的には必須科目である	30
14	g 読本教科書が悪い	17
14	i 教師が生徒を自主性がないようにしむけるから	17
16	e 時間割の組み方が悪い	13
17	p 同一校で英語科の教師が協力しないから	12
18	f 文法教科書が悪い	11
18	b 学級担任制度と共に、教科の主体制も重視するという風潮がない	11
20	m reading, writing を重視していないから	10
21	y わからない	8
22	x その他	6
23	q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されていないから	4
24	j 教師がまちがった厳格主義で指導するから	3
25	o 高度な内容のものを重視しないから	2

## 英語教育の諸問題

### 1. クラスの生徒数

米国の公立中学・高校では一クラス 20～30 人であり，私立では10～15 人である。外国語の授業は公立・私立を問わず 10～15 人程度であろう。我が国の場合はそれと比較にならない程の大クラスであることは，アンケート（5）によってもわかる。英語教育の場合には，クラス全員に毎時間

アンケート 5

貴校では一クラスの生徒は約何名ですか		
一クラスの生徒数	解 答 数	百 分 比
a 1～15	12	4
b 16～25	14	4
c 26～35	21	7
c 又は d	2	1
d 36～45	91	29
d 又は e	2	1
e 46～55	153	49
e 又は f	2	1
f 56～65	15	5
g 66～75	2	1
h 76～85	0	0
i 85～96	0	0
j 96以上	0	0

何回もあてて practice させることが大切なので特に小人数編成のクラスが望ましいわけである。又次に述べる「教師の負担」と大きな関係があることはいうまでもない。

## 2. 教師の負担

大クラス編成又はクラス担任制のために、テストの採点や担任の生徒指導には大変な苦勞がある。更には持時間が多いので教師自身の研究も不十分になる。専門教科以外の事務過重のために専門教科の準備が不満足となる。これがアンケート(4)の項目(t)にあるような「教師の薄給」と裏表をなして教師の弱体化を助長したといえるのである。同じくアンケート(4)の項目(r)「教師が不勉強だから」に38票の解答を得たのは、あながち教師の怠慢を非難する声とのみ受けとることはできない。それを裏書きするものとして、アンケート(3)で、項目(I)「教師が努力しているから」という解答が~~115~~<sup>121</sup>票の多きに達していることから推察できるのである。教師の負担を解消するには、前記のように、小人数のクラス編成、持時間の削減、雑務からの解放が要因としてあげることができる。又教育制度の面から考えるならば、学級担任制の再検討、能力別学級制の実施によって教師の負担をいくらかでも軽減しなくてはならない。

## 3. 補助機材及び施設

LLについては、米国の諸都市で私が見学した限りでは、殆んどの公立中学・高校で設置されていた。我が国ではアンケート(6)で示されているよ

アンケート 6

貴校には LL がありますか (簡易 LL を含む)	
a あ る	15
b 建設予定	14
c な い	282
答 な し	3

アンケート 7

LL のブースはいくつもありますか	
a 25以下	4
b 26～45	5
c 46～75	9
d 76以上	0
答 な し	11

うに普及度は低い。LL をフルに活用するためには、十分な教材と担当教師及び助手にそのための十分な時間が与えられなくてはならない。LL 設置のために相当な予算をかけても、教材及び担当員のための十分な予算が考慮されなければ宝のもちぐされになりかねない。

アンケート (8) にみられるように、英語科専用の教室をもつ学校も少ない。これは我が国の場合、学級本位の教育制度であるために同一の教室で殆んどの授業を行うことになっているからである。理科教室で理科の授業及び実験を行うように、英語教育に適した机の配置、英語教育の教具教材を整えた英語科専用の教室で授業をするということが望ましい。米国の場

アンケート 8

英語科専用の教室はありますか	
a ある	11
b な い	303

合、単位制又は教科本位の教育制度なので外国語科専用の教室がどの学校にもみられるし、スライドやフィルムまで備えている教室もある。ある中学では、机をコの字状に配列し、教師が生徒の間に入って指導でき、どの生徒とも同じように接近し、じかに触れ合い、大きな効果をあげていた。

アンケート (9) をみると、テープレコーダーやレコードプレーヤーは殆どどの学校で備えていることがわかる。これらの教具はもはや英語教育にはなくてはならぬものだという段階にきている。現在では更にその機材の音質の改良や台数の増加をはかる必要がある。

#### アンケート 9

貴校にある補助機材は何ですか (いくつでもお答え下さい)	
A LL	15
B テープレコーダー	299
C レコードプレーヤー	285
D ラジオ	180
E テレビ	185
F Picture card	154
G 掛 図	174
H その他	73

アンケート (10) によると、LL を備えている学校では LL の利用率はさすがに 100% に達している。一方、テープレコーダー、レコードプレ

アンケート 10

先生は次のうちどの補助機材を英語教育に利用しますか（いくつでも）			
項 目	解 答 数	解答総数（314） に対する百分率	所有校数に対 する利用率
a LL	15	5	100
b テープレコーダー	246	78	82
c レコードプレーヤー	220	70	77
d ラジオ	46	15	26
e テレビ	48	15	26
f picture card	128	45	83
g 掛 図	131	42	75
h その他	61	19	84

ーヤー、ピクチャーカード、掛図は、学校に備えてある限りにおいて、利用率も著しく高い。膨大な費用を要するLLを設備することができればこの上ないことではあるが、その前に先ずこのような安い費用の機具・教材を、すべての学校が備え、それらを十分に活かし得れば教育効果は大きいことが予測できるのである。ラジオ、テレビは備えてあるにもかかわらず、利用率が低いのは時間を繰り合わせるができないからであろう。

#### 4. 生徒の自主性

英語教育の成果に不満の声のあがる原因の一つとして、生徒自身に自主性が乏しく恥ずかしがるということをあげることができる。生徒が自主性を喪失するのは帰するところ、教師の責任であるということもいえる。



例えば生徒が勇気をふるって折角質問をしにきても、「こんなことがまだわからないのか」と一喝のもとに退ける教師、英作をやらせて語順も綴りも正しいのに、ただ三人称単数現在動詞の S がなかっただけで零点にしてしまう教師。このような教師の前では生徒はただ憶病になるばかりである。又、国民性や従来の教育思想の欠陥が教育活動を妨げるともいえる。例えば「ことあげせぬ国」、「見ざる、聞かざる、言わざる」、「三尺さがつて師の影をふまず」というようなものの考え方が現代の教育にも影響を及ぼして、教師への絶対服従を生徒に要求し、教師の言葉はすべて正しいと考えさせられたのが戦前の教育の姿勢であった。戦後、形は変わったが、中身まで一変させることはできなかった。戦後の教育にはめざましい発展もあるが、教師から生徒への一方通行というきらいは根強く残っている。質問や英語の発音練習がてれくさいとか、間違えると恥ずかしいというような考え方が英語教育を阻害していることもたしかである。このような点を改める工夫は英語教師に与えられた大きな課題であろう。

## 5. 入 試

入試はアンケート (4) では第 5 位にあげられているが、同時にアンケート (3) でも第 4 位になっている。ということは善きにつけ悪しきにつけ問題があるということになる。すなわち一方の見方からすれば英語教育にプラスになるが、他の見方からすればマイナスなのである。それ故一つの視点に立って入試というものを分析考察してみよう。この視点を大所高所より設定すれば次の二点があげられることは容易である。

イ. 個性を活かす教育

ロ. 学問の無駄を排す

現在、大学から高校へ、高校から中学へとおせおせの状態では英語が入試科目となり、又実質上の必須科目となっている理由は、(1)大学で学問をするからには洋書が読めなくてはならないからであり、(2)就職試験で英語が課

せられているからである。大学で洋書が読めるようになるためには、中学から英語を勉強する必要はない。勿論早くから学ぶに越したことはないが、学習者が若ければ若い程好悪が激しいので学習者に関心をもたせるための他力的条件が必要になってくる。逆に、年令が高くなればなる程習得能力は衰えるがその反面には理解力と学習者の自力的作用が大きくなる。旧制高校に入学した者が始めて仏語・独語を集中的に学んで大学で洋書を読む力を十分に養い得たことは周知の事実である。大学で洋書を読むために、大学に進学しない者又は語学に興味をもたない者までも高度な英語を新制高校・中学で強制されるということは学問の浪費であり、生徒の個性を無視する教育となりがちである。英語が基礎学科であり、義務教育であるという理由に基づくものならば、新制中学・高校では文字通り基礎的な英語を確実に習得させるにとどめるべきであろう。従って高校・大学の入試及び就職試験では英語を純然たる選択科目とすべきである。（昭和42年春季号「潮」掲載の岩村忍氏の「語学教育の再検討」参照）

又、会社の採用試験にも大きな無駄がある。伊東光晴氏は次のように述べている。

「毎年のようにくり返されることは、一方でスペイン語がわかり、経済に明るい人を求める会社は人が得られないにもかかわらず、スペイン語を修得したものが銀行の窓口でお札を数えるということになるのである。」

（朝日ジャーナル Vol. 9, No. 20, p. 64「学問の浪費を排せ」）

採用試験が受験者の個性や特技を探しあてるためではなく、一般教養を判定しようとする惰性的でしかも模糊とした目標しかないが故に、このような結果が生ずるのであろう。学校教育がこのような就職にふりまわされて英語を入試に課し、ひいては英語を必須科目としているならば、ここにも教育の没個性と学問の浪費を痛感するのである。

受験勉強の礼讃者はそれでも尚跡を絶たない。激甚な競争の中で遮二無

二勉強する間に人間は眼を開かれ、そして飛躍するものであるというのがその大きな理由である。しかし受験勉強によって何かを悟り、何かを得るような人間は災を転じて福となし得る人間なのである。そういう人間は受験勉強によらずとも、他の教育的条件のもとにおいてもやはり開眼し飛躍する人間である。いや、受験勉強以外のもっとよい教育的環境を与えていたとするならば、もっと貴重なものを体得しているかもしれない。それはさておき、受験勉強によっていためつけられている人間が、社会の底辺にその何倍もうごめいていることを何よりも重視せねばならない。受験勉強の害は今更ここに述べるまでもないが二、三の例をあげてみよう。国語の授業に作文を書く回数が戦前に比べて大変少くなっている理由の一つは、入試に作文が殆んどないからである。文を書くことと読書の厚みや深さは互に止揚されその結果思想が定着するのに、その一方が実行されないからには、国語教育の成果を期待することはできない。いわんや文章が下手だとか字を知らないという世間の批判は当然のことである。又受験に成功するまでは社会に眼をとざし、よみたい名著を遠ざけるという現象も多い。又戦後教育制度の大きな目標の一つである特別教育活動は未来の社会人としての人間形成に役立っているであろうか。ホームルームは受験勉強や補講に利用されるという悲しい例も少なくない。英語教育についても、最大多数の生徒のために最大の効果をあげねばならないのに、現在の受験英語は極く少数の生徒のためにはよいかも知れないが、多数の生徒を犠牲にし、英語を嫌悪するような結果を招いている。そればかりでなく、受験には殆んど不必要な *hearing* と *speaking* は無視されるために、*hearing* と *speaking* を基礎として学習しておけば将来もっと上達する筈の *reading* と *writing* の学力をも阻害することとなるのである。

## 6. 教授法

アンケート (4) の第 6 位にのぼったものは項目 (n) の「基礎的で単純

[第3表] 日本における英語教授法の比較

	Grammar-translation method	Reading Method	Natural Method	Direct Method	Oral Method	Oral Approach
英語学習の目標	reading, writing の習得, 海外文化の吸収に資する。native speaker のものの考え方を学ぶ。頭脳, 精神の陶冶	native speaker と同じように早くよめること	読書力を目標とする	読書力を目標とする	英問英答を指導目標としてそれによって言語習慣を達成する	できるだけ完全な理解を達成する recognition と production 両面の習得
	言語学習は知識の習得である				言語学習は技術の習得である	言語学習は技術の習得である
文法	意味中心の文法 範範文法 一般文法  文法を通して演繹的に理解させる	文法は最小限度	文法は口頭作業の中で帰納的に習得させ、組織的文法事項は最終段階まで保留する	読書材料に則した文法の帰納的指導	四技能の中で文法を帰納的に指導する	構造主義 意味の軽視 記述文法 比較語学 実例を口頭練習させながら文法事項を帰納的に理解させる
教材	項目中心的, 例外事項や語形などを重視し, 文構造より単語に力点を置く。項目中心に配列され, 項目と項目との関連性が少ない	句を単位として学習させる	教材は易から難へ具体的なものから抽象的なものへとという順序で配列し, 新出語は既習語で理解させる  制限単語に無関心	単語を学習の単位としないで, 句又は文を単位として学習する  物語中心の教材	教材配列は英米人からみた「英語の易から難へ」を基準とする  物語中心の教材  制限単語を重視す	対比を常に考え教材の配列を重視する。例文の使用頻度を重視し, 語よりも構造や語の機能に力点を置く。新出教材と既習教材との対比を重視。日本語と英語との構造の分析比較の上に立って教材を選択配列する。教材内容は文型中心, 学習が機械的になる恐れがある。制限単語を重視する
指導法	writing と reading の重視  文法による論理的な理解暗記  翻訳 (英文解釈) の重視 日本語による説明の重視  視聴覚教材は重視しない	口頭作業の軽視  黙読 多読 速読 直読直解  翻訳はしない 日本語を介入させない	口頭作業の重視 spoken language に習熟するまでは written language を無視する 教師の反復音読をまねする oral composition 文の暗記  翻訳はしない 日本語を介入させない 教師は英米人であることを重視  幼児が母国語を習得する過程をそのまま成人にも外国語習得にあてはめる 実物, 絵, 動作, 身振りなどで英語を理解させる	口頭作業の重視  反復音読 直読直解 読書力を獲得するための過程として英問英答 英語による会話 討論読書等実践的な訓練  翻訳はしない 日本語を介入させない  英語特有の語感を把握させ直接連想の習慣をうえつける 母国語を習得する過程に準じて外国語を習得させる  実物, 絵, 動作, 身振りからの類推を重視する	口頭練習の重視  Classroom English imperative drill substitution conventional conversation thinking in English  必要に応じて日本語を認める  二重連想から直接連想へ導く  視聴覚教具を利用	発音練習は音素論に基づいて行う 口頭練習の重視 written language は家庭学習にあて効果的にテストを利用する  Oral introduction mimmen substitution & answers pattern practice contrast controlled conversation reading, writing  翻訳はある程度認める 日本語による説明は最小限にとどめる  視聴覚教具の積極的利用
音声	文字言語の重視 written language を習得しておけば spoken language はいつでもひきだせる 発音記号は利用するが音声は軽視する	音声軽視 written language を通して spoken language を習得させる  発音はあまり注意しない	spoken language のみを習得させる  発音記号は使わない	音声重視 spoken language から written language へ  発音記号は採用し, 発音は徹底的に指導する	音声言語が一次的 spoken language から written language へ  発音を重視する	音声言語が一次的 spoken language と written language を平行して指導する  音素にもとづく組織的な指導

各条項につき、左か右かどちらかをえらび英語教授について先生の御意見に近いものを○でかこんで下さい

項	目	中学	中高 共通	高校	小計	項	目	中学	中高 共通	高校	小計
A	外国の書物を通して海外の文化を吸収するのが目標であって、大多数の日本人には会話の必要はないのだから、reading, writing を習得すればよい	5	4	11	20	a	外国の書物を通して海外の文化を吸収するのが目標だからといって hearing, speaking が不必要だとはいえない	104	57	51	212
B	reading, writing の力を習得しておけば、いつでも hearing, speaking を習得することができる	16	15	26	57	b	hearing, speaking の習得こそ reading, writing を習得するための早道である	89	42	39	170
C	頭脳・精神の陶冶にもなるので、文法の法則を暗記し文章を分析し文法にのっとって英文をつくるのが大切である	10	4	12	26	c	文法は大切ではあるが、規範文法ではなしに記述文法を、written side からの文法ばかりでなしに spoken side からの文法をむしろ重視する	89	42	43	174
D	論理性をやしない、ひいては英語を母国語とする人々のものの考え方を学ぶのが目標だから文法的に分析しながら英語を学習することがよい	26	17	24	67	d	英語の学習とは英語を理解することではなくて、自動的・反射的に使えるようになることである。それなくして抽象的目標を追求しようとするのは本末転倒であり、英語教育本来のあり方ではない	73	35	34	142
E	従来の規範文法による英語の学習は、学習者に理解させ易い。殊に成人に近づく程、ものをおぼえたり、まねをしたりすることが不得手になるので、理解をなかだちにした学習方法はより一層効果的である	13	8	15	36	e	従来の規範文法は日本人が英語を学習するために甚だ非能率的である。なぜならこれは英語を母国語とする人々に都合よく書かれたものだからである。だから日本人のために比較語学の立場から書かれたものでなくてはならないし、慣用を重視する記述文法が大事である。 又、いくら学習者が記憶やものまねに不得手であっても、practice を重視し、帰納的に文法を指導するのが効果的である	81	42	38	161
F	だれでも母国語はきいたりしゃべったりすることができるのに、どこの国でも文盲がいなくなることはない。これは written language が spoken language とは別のものである。written language の習得にはそれなりの方法が必要なのである。spoken language さえ身につけておけば written language は自然にできるようになるというわけにはいかない	19	12	16	47	f	spoken side から言語を身につけておけば written side からの言語も自然に身につけることができるというわけでは勿論ない。しかし spoken side から身につけておけば、written language はより一層深く、かつ能率的に習得することができる。	81	35	38	154
G	英語の学習は知識の習得であって、スポーツ・音楽のような技術の訓練・習得とは違う	14	12	18	44	g	英語の学習はスポーツ・音楽と同様に技術の訓練・習得が先ず第一に必要である	82	32	36	150
H	日本語による説明や翻訳が多くてもやむをえない	30	27	29	86	h	日本語による説明や翻訳を最小限にくだとめ、やむをえないときにだけこれを行う	63	33	26	122
I	自然なやり方又は oral drill, pattern practice は機械的で単純なので学習者に興味を与えることもできないし、あきさせ易い	4	3	13	20	i	学習者に興味を与えることは大切だが、高度な又は抽象的な内容にかたよらず、基礎的でも単純ではあっても oral drill, pattern practice がたえず必要である	106	52	44	202
J	新しい教授法で教えても生徒は少しも本がよめず綴字が書けない	6	4	17	27	j	新しい教授法で教えても、reading, writing がよく出来ないのは、oral が悪いのではなくて、reading に入る時の扱い方に欠陥があるからである	84	39	35	158
K	視聴覚教具教材は使用してもよい	11	10	20	41	k	視聴覚教材を大いに利用する	98	44	35	167
計		154	116	201	471	計		940	453	419	1,812

な反復練習を重視しないから」であった。これは第 8 位の項目 (l), 第 12 位の項目 (k), 第<sup>20</sup>~~19~~位の項目 (m), 第 25 位の項目 (o) と共通の問題なので一緒にここで考えてみたい。要するにこれは教授法の問題である。明治時代まで漢学の訓詁注釈が外国語研究の主流をなしてきたので、明治時代に入ってきた欧米語の研究はその影響を著しく受け、更には英語の義務教育化により、又は上級学校の受験に英語が必須科目となったために、我が国には独特の英語教育が発達した。欧米に生れた Grammar-Translation Method も日本流にその形を変えた。その他幾種類かの英語教授法が紹介されその影響も少くない。ここで我が国の英語教育に影響を与えたそれらの教授法を〔第 3 表〕によって比較してみよう。この表にみられるように教授法は多様ではあるが、現場の英語教育の実態を大別すれば二つの流れに分けることができるかと思う。アンケート (11) はこの二つの傾向を示したものである。

ここでアンケート (3) 及び (4) の中で教授法に関する項目をぬき出してみよう。第 4 表及び第 5 表がそれである。この二つの表から、現場の先生は “reading, writing” より “hearing, speaking” を、「高度な内容のもの」より「基礎的で単純な反復練習」を重視していることがわかる。この傾向は明らかに Oral Approach 又は Oral Method の影響によるものであろう。しかし最近に到って Oral Approach の理論的根拠をなす構造言語学が変形文法の立場から多くの批判を受けるようになった。構造言語学は変形文法によって大きな覚醒を迫られている。文法理論として変形文法はすぐれてはいるが、指導・学習・practice の方法論として Oral Approach は緻密周到な配慮が払われており、これにまさるものはまだあらわれていないといえるのである。

英語科ほどいろいろな教授法が云々されている教科はない。従って同一の学校において A 先生は Oral Approach を採用しているが、B 先生は

〔第 4 表〕

我が国英語教育の成果があがっているとすればその原因は何ですか。（○をいくつつけてもかまいません。）	
K 教授法がよい	39
L hearing, speaking を重視しているから	60
M reading, writing を重視しているから	23
N 基礎的で単純な反復練習を重視しているから	108
O 高度な内容のものを重視しているから	5

〔第 5 表〕

我が国英語教育の成果があがっていないとすればその原因は何ですか。（○をいくつつけてもかまいません。）	
k 教授法が悪い	
l hearing, speaking を重視していないから	
m reading, writing を重視していないから	
n 基礎的で単純な反復練習を重視しないから	59
o 高度な内容のものを重視しないから	2
w 日本人にとって英語の学習は困難だから	38

Grammar-Translation Method で授業をしているというような現象はよく見かけるのである。だから一人の生徒が一年のときと二年のときとは全く違った英語の授業を受けるということになる。これは生徒にとってプラ

スになることもあるが、マイナスになることも多い。教授法は違い、教師個人の持ち味や方針にはそれぞれ特徴があっても、同一の学校において英語科の教師が英語教育について話し合い、一つの基本線を打ち出すことができれば、より効果的であろう。このことについては、アンケート(12)及び(13)が一つの方向を示してくれる。

ア ン ケ ー ト 12

貴校では英語科全体で、ある特定の方針又は教授法を統一してやっておられますか			
項 目		解答数	百分比
A 徹底してやっている		9	3
B 教師個人の方針を尊重しながら統一した方針もたてている		232	74
C そんな必要を認めていない		24	8
D そういうことは無関心		23	7
E そ の 他		23	7
F わからない		0	0
答なし		3	1

ア ン ケ ー ト 13

先生は英語科全体で、ある特定の方針又は教授法を統一してやることは大切なことだとお考えになりますか			
項 目		解答数	百分比
a 徹底してやるべきだ		37	12



b 教師個人の方針を尊重しながら統一した方針もたてるべきだ	249	79
c そんな必要を認めない	19	6
d そういうことには無関心	1	0
e その他	3	1
f わからない	2	1
答なし	3	1

## 7. 能力別学級

能力別学級制度に反対の意見も多い。それは日本人には恥やみえがあるので能力別学級は学習意欲を低下させるというのが大きな理由である。能力別学級制度を実施している学校は数少い。それらの学校では能力別学級の本来の機能を発揮しているとは言いがたい。たとえば全科目又は数科目の総合点によって生徒の順位をつけ、1番から50番までは優秀クラス、51番から100番までは普通クラス、101番から150番までは劣等クラスというような機械的なクラス編成である。従って優秀クラスには例えば国語と社会は優秀でも数学は劣等な生徒もいる。この生徒には国語と社会は適性な指導はできるかもしれないが数学はついて行けないような指導が行われることになるだろう。又、劣等クラスには例えば国語と社会は劣等でも数学は優秀な生徒もいるだろう。この生徒にとっては数学の授業は、はがゆくて不満が多く、遂には数学にさえも興味を失うようになるだろう。又、優秀クラスには信用のおける教師又は老練な教師を配置する傾向があるのは、能力別学級制度が優秀な生徒だけに力点を置き、彼等の尻をたたくための制度であるというような間違った考えに基づいているからであろう。

能力別学級制度は劣等な生徒の個性を引き出すことに一つの大きな目標があることを思えば、劣等クラスにこそ優秀な教師を配置せねばならない。このように考えてくると、形式だけ能力別学級制度を実施することはむしろ百害あって一利もないということになる。

では能力別学級本来の機能を発揮するためにはどのようなお膳立てが必要であろうか。第1に、資料となる試験問題が慎重でなければならない。中間・期末のテスト及び実力テストだけで生徒の順位を決定することはできない。重要な学習事項はときどき小試験を行って評価されなくてはならない。又、生徒の普段の授業態度も勘案されなくてはならない。これは教師の感情や主観に左右されて生徒の個性の芽生えを妨げることもあるが、生徒の立場を常に考えている限り、教師の主観はむしろ大切にせねばならない。第2に、各科目について能力別学級を編成しなければならない。いろいろな科目の総合点によってではなくて、国語なら国語について生徒の順位をつくり、国語だけの優秀クラス、普通クラス、劣等クラスが編成されなければならない。他の科目についても同様である。このようにすべての科目が科目毎に能力別学級であれば、相当優秀な生徒でも何科目かは劣等クラスに入ることもあろう。逆に、いくら全体の成績が悪い生徒でも、ある科目では優秀クラスに入ることもなる。従って優越感も劣等感もうすめられ、すべての生徒がある科目では自信をもち、ひいては自己に対する自信も生れてくるであろう。そこから恥やみえに対する考え方も変わってくる。ただしこのようなコンプレックスや恥やみえは不断の教育の中においても教師が払拭する努力を怠ってはならないことはいうまでもない。能力別学級制度は得意科目を益々のばすことによって自分の個性にめざめさせ、同時に教師にとっても生徒にとっても各教科の学習を能率的に進めることにもなるのである。しかしこのような能力別学級制度は、形式的ならざる単位制及び選択科目制が併用されて始めて理想的に実施可能となる。

従って能力別学級制度を実施するためには我が国の教育制度そのものを再検討せねばならない。

#### 8. 選択科目か必須科目か

アンケート (3) によると「名目上は選択科目でも実質的には必須科目である」が第1位になっている。ところがアンケート (4) においても第13位とはいえ、30名の先生が英語教育の成果のあがっていない原因として指摘しているのは何故であろうか。

語学の好きな生徒や語学的才能のある生徒が、そうでない生徒と共に授業を受けるので前者はのび悩み、後者は劣等感を抱き、両者が学習効果を相殺してしまうのである。これを効果あらしめるためには首尾一貫した教育施策がなければならない。すなわち必須科目として全生徒が学ぶことを要求するのならば、能力別学級制度を実施して、そのクラスに応じた授業とテキストが採用されることが最も効果的であろう。又選択科目制度を名目的でなしに実質的に施行するならば従来の学級担任制でよいし、学力差に応じた各種の教科書がどうしても必要であるということもない。この一貫性を図式化すれば次のようになる。

必須科目制度 → 能力別学級制度 → 学力に応じた授業及び教科書

選択科目制度 → 学級担任制度 → 一定目標達成のための  
授業及び教科書  
ところが現状では次のようになっている。

必須科目制度 → 学級担任制度 → 一定目標達成のための  
授業及び教科書

ここに述べた「一定目標」とは具体的には学習指導要領を指しているのであるが、「一定目標」の実体は学習指導要領ではなくて大学入試に置かれているところに大きな問題がある。第5章において「高校・大学の入試及び就職試験では英語を純然たる選択科目とすべきである」と述べた大きな原因の一つはここにもあるのである。

次に、現在の中学も高校も各学年で学ぶべき必須科目が多いばかりでな

く、各科目が相当高度な内容を盛っている。しかも選択科目は有名無実である。このような科目全部にわたって十分な学力を身につけさせようとすることは生徒に大変な負担であるばかりでなく、中学卒業生のうち高校へ進学する者が80%に達する昨今にあっては元来無理な話であり、内容が不消化に終るのは当然のことといわねばならない。ところが中等教育は高度な基礎学科を身につける教育であるという理由で多くの学科を必須科目とすることは、余りにも総花的である。実質的な単位制を施行して一年次で取得できなかったら二年次で取得できるようになっていればまだしも、これまた有名無実な単位制のもとでは個性を活かす教育はおろか、義務教育化しつつある中等教育すなわち少数のための教育ではなく最大多数の生徒のために最大の効果をあげるべき教育の目的に反することにもなる。これは基礎学科はすべて中等教育において身につけさせねばならぬという前提があるからではないだろうか。米国では大学においてさえも後期に入ってから教養学科を取得できるという事例でもわかるように、基礎学科を中等教育において網羅的に習得させようとするのは無理ではなかろうか。従って三年間に修得すべき必須科目数を大巾に少くし、選択科目数を多くするか、又は必須科目数は現状通りでよいが、そのかわり単位制本来の目的を活かして必須科目を何年次に取得してもよいという風なゆとりを与えることが生徒の学習の能率をあげ、更には生徒の個性をのばす所以であろうと思うのである。

## 9. 教科書

文法・読本両教科書共に、アンケート(3)によると「よい」という声も少ないが、アンケート(4)によると「悪い」という声も少ない。従って教科書については、これ以上望むことは無理であるというのが同アンケートの結論なのであろうか。それとも教科書についてはあまり関心がないのか、あるいは教科書そのものよりも教科書を使用する教師の扱い方に問

題があると考えためであらうか。

次に教科書は各学校でどのような形で採択され、教師はどのように採択されることを希望しているのかを、アンケート (14) 及び (15) でみてみ

アンケート 14

貴校の英語科では教科書の選定について原則として どんな方針をおとりですか			
項 目		解答数	百分率
A 例年全校同一のものを使用する		125	40
B 必要に応じてときどき変える		88	28
C 同一の生徒については一年生のときから三年生になるまで同じ方がよいが、入学年度により、毎年又は隔年変える		81	26
D そんな方針の必要を感じない		1	0
E その他		15	5
F わからない		1	0
答なし		3	1

アンケート 15

先生個人の御意見として、アンケート (14) についてはどれがよいとお考えですか			
項 目		解答数	百分率
A 例年全校同一のものを使用する		78	25
B 必要に応じてときどき変える		117	37

C 同一の生徒については一年生のときから三年生になるまで同じ方がよいが，入学年度により，毎年又は隔年変える	104	33
D そんな方針の必要を感じない	1	0
E その他	9	3
F わからない	0	0
答なし	5	2

よう。尚，この結果は中学校教科書の統一採択が決定される前に集計されたものであることを附記しておく。

教科書については，拙文「英語教育の外的条件」（大修館発行「英語教育」Vol. 13, No. 12, p. 12），及び「教科書検定と統一採択問題私見」（研究社発行「現代英語教育」Vol. 2, No. 9, p. 11）で述べているので，ここでは結論だけにとどめる。文部省検定済の教科書を使用することになっている現行教育課程においては，如何に副読本も併用し得るとはいえ，中等教育における教授内容はこの文部省検定済の教科書によって方向づけられ又は束縛されることというまでもない。従って教授法について傑れた考えをもつ教師がいてもその教授法に，ある程度ふさわしい教科書がなければ，この教師の抱負は現場で活かされないことになる。教師の理想は一人一人の教師が自分の辞引と自分の教授法をもつことであろう。そうするとその結果は一人一人が自分の教科書をもたねばならぬことになる。それが不可能である以上，傾向を同じくする教師達の最大公約数ともいふべき教科書が何種類かあって欲しい。たまたま英語科には他の教科にくらべて教授法の種類が最も多い。文部省の検定に合格する英語教科書がすべて独特の教授法に則して書かれていれば，自分の教授法に近い教科書がある程度

選べるので、教師が教科書を採択する心構えはおのずから生き生きしてくるであろうし、教師が教科書によって教え方を啓蒙されるということも多くなるであろう。

#### 10. 教育現場の合理化

今まで第2表を検討の資料として考えてきたわけであるが、まだその対象となっていない項目を拾って考察してみると、そこには一つの傾向が底流していることに思い当るのである。第6表はこれらの項目を集めたもの

〔第 6 表〕

順 位	項 目	解 答 数
16	e 時間割の組み方が悪い	13
17	p 同一校で英語科の教師が協力しないから	12
18	b 学級担任制度と共に、教科の主体制も重視するという風潮がない	11
23	q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されていないから	4
24	j 教師がまちがった厳格主義で指導するから	3
	計	43

であるが、そこに底流する問題とは教育の現場における不合理や無駄ということである。この問題こそ教育の盲点といえるのではなかろうか。なぜならば些細なこととして教育の現場に散在するので目立たないが、その総和は大変大きな問題として教育を妨げているからである。このような不合理・無駄は教育機構の中で、学校の中で、又教師一人一人の仕事の中で整理され工夫されなくてはならないのではなかろうか。尚、アンケート(16),

(17), (18), (19) はこの問題の一部を明らかにしたいために集計したものである。

アンケート 16

貴校ではクラス担任はどのようにしてきめられますか			
項	目	解答数	百分率
A	原則として毎年担任にあてられる	140	45
B	原則として三年間担任を続けると一年間は担任を免れる	23	7
C	大体交替制	19	6
D	担任をもつ教師ともたない教師が色別けされている	32	10
E	なんら原則はない	70	22
F	その他	14	5
G	わからない	7	2
	答なし	9	3
	計	314	100

アンケート 17

英語の受持ちクラスはどのようにしてきめられますか			
項	目	解答数	百分率
a	英語科教師それぞれの意見・希望が重視されている	152	48



b 英語科主任の意見が重視されている	16	5
c 主に教務又は特定委員会等がきめる	41	13
d 主に校長がきめる	47	15
e 総合的意見による	42	13
f その他	8	3
g わからない	2	1
答なし	6	2
計	314	100

アンケート 18

貴校の英語科では英語の受持ちは原則として次のうちどれが採用されていますか			
項	目	解答数	百分率
A	もちあがりの傾向が強い	99	31
B	文法専門教師・リーダー専門教師それぞれ専門化の傾向	5	2
C	一年生専門教師，二年生専門教師という具合に毎年同一の教師が同一学年を受持つ傾向	18	6
D	学校の事情により，以上のような一定した方針はない	173	55
E	そんな必要を感じない	5	2
F	そんなことは考えていない	4	1

G その他	3	1
H わからない	1	0
答なし	6	2
計	314	100

ア ン ケ ー ト 19

貴校の英語科では英語の受持ちは原則として次のどれがよいとお考えですか。先生個人の御意見をおきかせ下さい			
項	目	解答数	百分率
A	もちあがり	124	39
B	文法専門教師・リーダー専門教師それぞれ専門化	22	7
C	一年生専門教師，二年生専門教師という具合に毎年同一の教師が同一学年を受持つ	46	15
D	学校の事情により，以上のような一定した方針はない	69	22
E	そんな必要を感じない	30	9
F	そんなことは考えていない	5	2
G	その他	9	3
H	わからない	6	2
	答なし	3	1
	計	314	100

## む す び

アンケート (3) の各項目を内容別に分類して集計すると第 7 表となる。又、アンケート (4) を同じ方法で集計すると第 8 表となる。これによって今まで述べてきた中等学校における英語教育の問題点を整理しておこう。それは、今後の英語教育の改善は何に重点を置くべきかをおのずから示してくれるものと思うからである。

〔第 7 表〕

項 目	解答数	小計
1. 国民性の問題		62
H 生徒が勤勉だから	35	
W 日本人は外国語に対するあこがれが強いから	27	
2. 教育制度の問題		246
C 名目上は選択科目でも実質的には必須科目である	129	
D 入試がある	107	
A 能力別学級でない	7	
B 学級担任制度	3	
3. 教育現場の問題		208
I 教師が努力しているから	121	
P 同一校で英語科の教師が協力するから	49	

Q 同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されているから	25	
R 教師が優秀だから	13	
4. 外国語教授法の問題		235
N 基礎的で単純な反復練習を重視しているから	108	
L hearing, speaking を重視しているから	60	
K 教授法がよい	39	
M reading, writing を重視しているから	23	
O 高度な内容のものを重視しているから	5	
5. 教材の問題		17
G 読本教科書がよい	13	
F 文法教科書がよい	4	
6. その他		5
X その他	5	
Y わからない	0	

〔第 8 表〕

項	目	解答数	小計
1. 国民性の問題			64
h	生徒に自主性が乏しく恥ずかしがりやだから	64	
2. 教育行政の問題			390
v	クラスの生徒数が多すぎるから	132	
s	教師の負担が大きすぎるから	121	
u	補助機材・施設が充実していないから	95	
t	教師が薄給だから	42	
3. 教育制度の問題			156
d	入試が悪い	63	
a	能力別学級でない	52	
c	名目上は選択科目でも実質的には必須科目である	30	
b	学級担任制度と共に、教科の主体制も重視するという風潮がない	11	
4. 教育現場の合理化を要する問題			87
r	教師が不勉強だから	38	
i	教師が生徒を自主性がないようにしむける	17	

e	時間割の組み方が悪い	13	
p	同一校で英語科の教師が協力しないから	12	
q	同一校で英語科の教師それぞれ独自の教育方針が尊重されていないから	4	
j	教師がまちがった厳格主義で指導するから	3	
5. 外国語教授法の問題			183
n	基礎的で単純な反復練習を重視しないから	59	
l	hearing, speaking を重視していないから	44	
w	日本人にとって英語の学習は困難だから	38	
k	教授法が悪い	30	
m	reading, writing を重視していないから	10	
o	高度な内容のものを重視しないから	2	
6. 教材の問題			28
g	読本教科書が悪い	17	
f	文法教科書が悪い	11	
7. その他			14
x	その他	6	
y	わからない	8	

## 参 考 文 献

- L. Bloomfield : Language
- C. C. Fries : Teaching and Learning English as a Foreign Language
- C. C. Fries : Foundations for English Teaching
- N. Chomsky : Syntactic Structures
- P. Roberts : English Syntax
- N. Brooks : Language and Language Learning
- 山家 保 : Pattern Practice と Contrast  
(開隆堂 英語教育叢書 No. 13)
- 日下部 徳次 : 構造言語学への道  
(開隆堂 英語教育叢書 No. 20)
- 現代英語教育講座 : 第1巻 英語教育論
- 現代英語教育講座 : 第2巻 英語教授法
- 現代英語教育講座 : 第3巻 新言語学の解説
- 飯野 至誠 : 英語の教育  
(大修館マニュアルシリーズ 10)
- Michael West : Teaching English in Difficult Circumstances
- 文部省初等中等教育局 : 中等教育講座 英語科編 (好学社)
- 大塚 高信 : 新英文法辞典 (三省堂)
- 文部省調査局 : 昭和39年度教育白書
- 潮 (春季号) : 教育問題総特集
- 伊東 光晴 : 学問の浪費を排せ  
(朝日ジャーナル Vol. 9, No. 20)
- 和光 大学 : 和光大学の新しい試み